

# AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises  
日本ケベック学会ニュースレター

2018年 春号

第9巻第1号(通算24号)

2018年4月30日発行

## モンREAL滞在中の学会・研究会見聞記

伊達 聖伸(上智大学)

2017年度は勤務先の上智大学から1年間のサバティカルをいただいて、ケベック大学モンREAL校(UQAM)のミシュリーヌ・ミロ教授を受入教官として、UQAMおよびモンREAL大学連合民族学研究センター(CEETUM)にて研究に従事しました。その成果の大きな部分は、『ライシテから読む現代フランス—政治と宗教のいま』(岩波新書、2018年)にまとめました。ケベックについては終章で少し触れた程度ですが、ご覧いただくと幸いです。

ここでは、今回の滞在中に参加したいくつかの学会・研究会で見聞したことについて、覚書のようなものを書いておこうと思います。

5月には、マギル大学で「フランス語圏学術協会」(ACFAS)の大会が開催されました。寒の戻りがあって雪が舞っていたのにはさすがに驚きました。私は発表のエントリーはしませんでした。特に「倫理・宗教文

化」教育についての2日間のセッションと、宗教研究についての2日間のセッションを拝聴しました。「倫理・宗教文化」教育は、2008年の導入時にも社会的な論争の対象となりましたが、それが継続あるいは再燃しているところがあり、セッションを聴いてその論点や重要なアクターのことがずいぶん分かるようになりました。宗教研究のセッションは、フランスのライシテ研究の専門家フィリップ・ポルティエを招いたテーブル・ロンドをひとつの目玉にしていました。また、デュルケム没後100年を踏まえた理論的な発表から、現代ケベックのスピリチュアリティを掘り起こすような発表まで、ヴァリエティに富んだ研究発表がありました。日本の宗教研究とフランスの宗教研究は「お国柄」が違うと思うことがしばしばですが、スピリチュアリティに対する研究者の関心ということでは、日本とケベックは案外近いのではという感想も抱きま

### ●本号の内容●

巻頭言(伊達 聖伸) …1

2017年 ACEQ 定例研究会の参加後記(陶山 宣明) …3

モンREAL探訪記2017(羽生 敦子) …5

リレー連載「ケベックと私」第5回…7

した。

6月には、マルチニックのアンティル大学で開催された「国際フランコフォニー学会」(CIEF)に参加しました。AJEQのブログにも小倉顧問・立花会長の記事がありますので、概要の説明はここでは省きます。私から見ると CIEF は文学研究者の多い学会で、間文化主義的なライシテについての私の発表にどのような反応が来るのか、当初は少し心配でしたが、割と好評だった印象を持っています。私にとってはなかなか行く機会のないマルチニックに、モンREALから時差なしでアクセスできたのも、サバティカルの恩恵のひとつです。

10月には、ラヴァル大学とシェルブルック大学で講演する機会をいただきました。ラヴァル大学のほうは、2014年暮れから翌年初めにかけて来日したルイ＝フィリップ・ランプロン教授から声をかけられてのこと。夏のあいだに本を一通り書きあげたと言うと、その内容でという話になったので、一部を取り出しアレンジを加えた発表をしました。タイトルは「過激化と闘うためにはいかなる寛容が必要なのか」。「シャルリ・エブド事件」から説き起し、ヴォルテールの『寛容論』を再読し、日本の渡辺一夫の議論を紹介する内容です。『シャルリ・エブド』の襲撃事件はランプロン氏の訪日中に起き、当時意見交換したことも思い出しました。実はこの講演日は10月18日で、ブルカやニカブの着用を規制することを定めた62号法が成立した日でした。講演後に

2人で出かけた食事の場で、この問題の専門家であるランプロン氏の意見を直接聞くことができ、贅沢な授業となりました。

シェルブルック大学のほうは、5月のACFASで再会したダヴィッド・クサンスに声をかけられてのこと。ダヴィッドは、私が初めてケベックの地を踏んだときにミシューリーヌ・ミロのもとでポスドクをしており、ケベックの扉を最初に開いてくれた面々の一人で、その後シェルブルック大学にポストを見つけて就職していました。モンREAL・シェルブルック間は車を運転して移動しましたが、見事な紅葉の景色がまだ目に浮かぶようです。講演内容は日本のライシテについてで、「社会・法・宗教研究所」(SoDRUS)のピエール・ノエル所長とも話が弾みました。ノエル教授は神学者ですが、マネジメント学部の所属なので疑問に思って尋ねたところ、神学部は大学の改組再編で取り潰された由。「静かな革命」後のケベックらしくもありますが、世界を席卷する新自由主義の影響でもあるでしょう。

11月末から12月頭にかけては3日間に渡り、「ケベックの宗教を研究する」と題された国際シンポジウムがUQAMで開かれ、ケベック内外から50人近くの登壇者が集まりました。私もケベックと日本のライシテを比較する発表で末席を汚しましたが、ロリー・ビーマン、レジノルド・ビビー、ギー・ラプリエール、ソランジュ・ルフェーブル、レイモン・ルミュー、ロベール・マジエ、



国際シンポジウム「ケベックの宗教を研究する」にて (2017年12月)

ジャック・パラール、ジュヌヴィエーヴ・ズブルスキーなど、それまで文献を通して接してきた名だたる研究者たちの警咳に接する機会を得て、大いに勉強になりました。英語の発表もありましたが、当然のように通訳はなく、参加者の多くがバイリンガルなのだと気づかされましたが、面白いのは、それでもなお英仏語の壁があることで、それは学風の違いとしても現われている印象を持ちましたが、現時点ではこれ以上具体的には説明できないあたりが歯がゆいところです。もうひとつ印象的だったのは、大家や大御所、バリバリの中堅も集結したこのシンポの企画運営は若手が中心ということで、基調講演に相当する冒頭の趣旨説明 (Mot d'introduction) も気鋭の若手研究者ジャン＝フランソワ・ラニエルによるものでした。こうして有望な若手を育てようとする意識と文化を見ることができ、私は感銘を受けました。

\*\*\*\*\*



## 2017年 ACEQ 定例研究会の参加後記

陶山 宣明 (帝京平成大学)

昨年11月18日(土)にセウルのカナダ大使館で開かれた ACEQ 年次大会に、私が AJEQ を代表して出席し、研究報告をしました。AJEQ と ACEQ の例年の交流にどれだけ有意義に役立てたのかはなほだ自信はないのですが、少なくとも恒例を絶やさずに、今年派遣される AJEQ 会員にバトンタッチできただけいいかなと思っています。韓国は初めてではなかったのですが、大学キャンパスを訪ねるのは初体験でした。成均館大学の寮に宿を取って頂き、恵化駅の辺りは自分にとって韓国で最も馴染みの界限となりました。日本を発つ前に、16日(木)には韓国の一大行事たる大学修学能力試験 (スヌン) が実施されると日本在住の韓国人に言われていましたが、到着してから、15日(水)に南東部で起こった地震の影響で史上初めてスヌンの1週間延期が決まったことを知りました。

ケベック州政府は、1867年カナダ憲法で移民が連邦と州政府の共有管轄となっていることに基づいて、1960年代から活発に独自の移民政策を展開してきました。1968年に、ユニオン・ナショナル党政権がケベック州に移民省を設立し、以来、移民大臣が内閣に任命されてきています。州政府にはカナダ全体におけるケベックの人口比である24%相当の数の移民を州内に定住させたい希望があり、ケベック特有のポイント



ACEQ 年次大会の受付風景

制度を实践して、ケベック経済に貢献できて、ケベック社会に統合しやすい移民を引き付けようとしています。私の報告はそうした過去から現在に至る大まかな流れに触れましたが、正直なところ最新の研究の成果を欠いていて、これからオリジナルな研究報告をしていくためには、独立移民と家族移民の資格以外での実質的な違い、移民の受け入れと間文化主義の関わり合い、ケベックの諸都市に一度住み着いた移民の二次的な州内・国内移動、ケベック州政府の海外での具体的な移民・難民選択活動などの諸側面を綿密に調査しながら、理解を深めていかないといけないことを痛感しました。

ディシプリーヌの学会が学問の本来の根幹を成すとしても、学際的な学会や地域研究の学会の隆盛は世界のどこの国でも顕著で、これから更なる発展が望まれています。日本人がケベックを研究対象として選ぶ理由はさまざまだと思いますが、ケベックを総合して分析しようとするケベック学会は

アメリカ合衆国では 1979 年に既に創設されています。地理的に隣接していて、かつ、ヌーベル・アングルテール諸州には古くからケベックからの多くの移民が定住している歴史に照らしても、アメリカ合衆国ではケベックへの関心が高いのはうなずけます。モンREALは、1967年に万国博覧会を招き、1969年に大リーグのフランシーズとなり、1976年には夏季五輪を開催し、国際都市の名をほしいままにしました。また、1970年の十月危機から一見すると「平和な王国」カナダにも仏語社会の存続をめぐって爆発し得る紛糾点を内包していることを世界に知らしめました。

以後、ケベックは、2度の州民投票を経て、ヨーロッパのエコスやカタローニュに先んじて西側先進国の中にも独立を希求する地域が存在することを印象づけています。独立が現実的な選択肢となるということは、その根っこには国全体とは違う社会、文化、経済があることの証しで、ケベックをカナダとは別個の対象として研究しようとする



発表直前の準備の様子

動きがあつて何ら不思議ではないでしょう。これから、アメリカ合衆国以外の先発ケベック学会として、AJEQ と ACEQ が手を取り合つて共に前進していけばいいと思っています。それも、毎年の会員交換にとどまらずに、近い将来、ケベックの共同研究が企てられるべきでしょう。双方で似通った研究テーマを持つ会員のペアを作つて、各章を仏語で共著するのです。日韓共同作業によるケベックの研究書が仏語で発行されたら、北米でも話題になるのではないのでしょうか。仏語能力はどちらの学会でも会員によって差がありますから、共同研究、執筆は挑戦的な学習過程になります。編集段階でケベックのフランコフォンの助けも絶対に必要としますが、決して実現不可能なプロジェクトではないと信じています。その際に関われるコングレも、セウルか東京かで、どちらの国からも複数の報告者がエキップとして参加する規模となります。

これから、世界の各地に新たにケベック学会ができてくると予想しています。レゾー作りが必須で、アンテナを張つて、日本のケベック学会はケベックの研究者の受信先となるだけでなく、積極的に発信先となつて、日本人の研究成果が世界の他の場所で注目されるようになればいいと思っています。AJEQ ももう少しすれば早 10 歳の誕生日を迎えようとしている時ですから、新たな一步を踏み出す時ではないのでしょうか。

\*\*\*\*\*

## <2017 年度小畑賞調査報告 1 >

### モンレアル探訪記 2017

羽生 敦子 (立教大学)

2017年9月4日、初めてのカナダ、初めてのケベックへと多少の不安をかかえながら旅立ちました。乗り換え地トロントでは雷雨に見舞われ、モンレアルのピエール・エリオット・トルドー空港に到着したのは朝の3時でした。最近、旅と言えば、旧友に会うため、あるいは以前旅した場所への再訪が多かったのですが、今回は、久しぶりに「知り合いが誰もいない未知の国」への旅でした。緊張感と孤独感がせめぎ合う不思議な感覚でした。タクシーに乗り込み、ホテルの番地を伝えたものの、「あれ、数字が多くない？間違っている？」と自問自答。なぜなら、700番台だったからです。フランスだったら、パリのあの長い Vaugirard 通りでさえ、200番台のはず。700とかありえないとさらに不安になったのですが、無事にホテルに到着。どんなに長い通りなのだろうと、太陽が昇ってから確かめることにしました。翌朝、理由がわかりました。フランスなら建物ごとに番地が振り分けられますが、ここでは、戸数によってそれぞれ番地が振り分けられていたのです。ホテル近くの軽食専門のレストランでは、パンケーキとカリカリのベーコン、そしてドリップコーヒーが提供されており、フランスではないどこかにいることを実感しました。モンレアルはまだ実感できません。

さて、次は、今回お世話になる Drouin 先



生の研究室訪問です。ケベック大学モンリアル校 (UQAM) の都市観光学部にあります。ご存知の方も多いと思いますが、UQAM は、地下鉄から直結しており、それぞれの学部への入り口が、慣れている人には簡単に、慣れていない人にはそれなりに表示されています。9月ということもあり、大学のクラブ勧誘の真最中でした。この雰囲気もフランスではないどこかを私に感じさせました。しかしながら、Drouin 先生の実験室は別棟にあり、結局、地上で道案内を乞うことに。「ケベコワは親切」というクリシェを実感した始まりです。無事に先生、および研究室の学生たちと会うことができました。フランス人3人とケベコワの研究者が2名、とりわけケベコワと結婚し現在博士論文を執筆中のフランス人女性とマルセイユ生まれの青年にはいろいろな情報を提供してもらいました。地理あるいは遺産 (Patrimoine) 関係の実験室ということもあり、サン・ローラン通りを境界線としたモンリアルの言語空間の形成や、かつてのフランス系労働者の地区で、現在では外階段を魅力的にアピールしたアパートの立ち並ぶプラトー地区、そして教会の再利用などについての知見を得ることができました。外階段が設けられた理由については諸説あるようですが、教会の影響だとも言われているようです。同じ建物ながら一戸が外階段というシステムで独立していることが、番地の付け方に反映されていたのです。納得でした。また、昼間、教会からスポーツウ



プラトー地区における S 字型階段のアパート

ェアで出てくる人を、夜には、ネオンで照らされた教会を見かけたのですが、ライシテ以降さびれてしまった教会の再利用ということでした。使われなくなった教会は、スポーツクラブ、カフェ、レストラン、あるいはアパートなどに改築されているようです。モンリアルについてほぼ旧港地区しか知識がなかった私は、かれらのおかげで、モンリアルの全体を把握することができました。滞在中、研究室のメンバーの一人の博士論文公聴会が開かれ、私も当然のように出席することに。わずか16日の仮研究員にも関わらず、正規のメンバーとして迎えてくださったチーム Drouin に今更ながら感謝の気持ちでいっぱいです。

モンリアルでは、BAnQ (Bibliothèque et



Drouin 研究室から見る ESG UQAM

Archives Nationales du Québec) で働く人々の親切さにも、たびたび触れました。私の漠然とした本探しに、せっかく日本から来たのだからと、当人以上に真剣に取り組んでくださいました。さらには、検索した本の一覧をプリントアウトまで。フランスはおろか日本でもなかなかこのサービスはないのではないかと思います。また1階のカフェコーナーでも、「え、いいんですか？」と思うことがありました。夜の8時ころ、カフェなんちゃらというおしゃれなコーヒーを頼んだところ、「ごめんね。もうマシンを清浄してしまったからできないんだ。フィルターコーヒーならあるけど」とのこと。私はそれで十分だったので、「あ、じゃそれで」と注文し、支払おうとしたところ、

「これ最後の一杯だからお金は要らないよ」との返事。ケベックの人々のさりげない親切には、ケベック初心者の私にとって驚きの連続でした。なんだか、日本の「おもてなし」がわざとらしくとても軽いものに見えてきました。

モンREALらしさとかケベックらしさというのはまだわかりません。しかしながら、「誰も知り合いのいない」場所ではなくなりました。再訪した時、「あーモンREALだ」と感じる事がその「らしさ」の発見につながるのかもしれませんが。その日を楽しみにしています。

\*\*\*\*\*

### <リレー連載「ケベックと私」第5回> 実存するモントリオールと私

瀬藤 澄彦

#### 過去の再生は可能

時間は真空のようである。見ることも、聞くこともできないが、空間を介してのみその存在を認識したような気になれるだけである。この原稿のご依頼をいただいたのはパリの西の郊外、ブローニュ・ビヤンクールのアパートマンにおいてである。前から気になっていたことがある。思えば自分の心がいつも揺れていた。自分の立ち位置はいったいどっちなのだろうか。勿論、モントリオールかパリかなどというアルティティブ(二者択一)の問題などではない。モントリオールに住んでいるときには、世界の「花の都」パリに対してとてもかなわないと思っていた。ケベックの標語にある「私



は忘れない」(Je me souviens) という表現は、フランソワ 1 世からルイ王朝にかけて大英帝国の北米領地をも凌ぐ成長と繁栄を誇ったヌーヴェル・フランスの時代の強い郷愁ではないのか。アンヌ・エベールは『最初の庭』(Le premier jardin) のなかで過去を現在の今まさにこのときのように描き出すことが可能であると書き記している。ベルリンの中央駅にも近いルイズ・シュトラッセ通りの森鷗外の下宿の家は今でも鷗外がそこから外出してきても全くおかしくない。リヨンで永井荷風の「ふらんす物語」に出てくる市内 6 区のアパートはまるで今でも彼が住んでいるようでさえある。この前パリに行ったときに自分の住んでいた 16 区のラフェ通りのアパートマン。 23 年ぶり



『モンテリオール 憂愁と復活』(1992 年刊)

に通りから見上げたが何も変わっていない。でもルイズ・カトリーヌ号の修復をした世界的建築家ル・コルビュジエの館がすぐ裏手にあることを知らなかった。ル・コルビュジエの取材をするために館長をインタビューして再発見した。

もう 30 年余りも経ってしまった。モンテリオールは、中央部にマウントロイヤルの丘があり、それを取り囲むようにウエストマウント、ウートルモン、ビル・モン・ロワイヤルなどの住宅地が広がっており、都市の景観はその時と変わらない。フランスのノルマンディとブルターニュの境にあるサンマロの街では自分がヌーヴェル・フランスを発見したジャック・カルティエの末裔だと 3 人も 4 人も名乗りでできた。こう見ていくとアンヌ・エベールの過去の再生はそんなに難しい作業でもないのかもしれない。場所、界限、などを克明に観察すれば可能なのである。もっと正確に叙述することさえ不可能ではないのかもしれない。

### 新たな展望が見えてくる

新古典派経済学によれば、労働や資本の市場における自由な移動によって経済空間の格差は縮小し収斂に向かって均衡に近づいていく。ところが欧州連合でもカナダでも事態はそのように進捗していかなかった。それどころか一部の大都市がますます発展拡大していくのに対して中小の規模の都市は逆に衰退していくようになった。これが最近注目を集めているいわゆるメトロポリザシオン (métropolisation) と呼ばれる現象



である。長い間、カナダの悲劇は米国の経済学者の巨匠のひとり J. K. ガルブレイスがいみじくも言ったように、あまりにも巨大な国、米国の隣に位置していることにあった。まさしく空間の立地が無視しえぬ要素であると言いつたものである。そういう点で注目してよい情勢の変化が生じている。ひとつはモントリオール - 東京間の空の直行便の開設決定である。ケベック州在日事務所のランブレイ所長にもメールで私の喜びをお伝えしたのだが、長年の、本当に長年の夢が今実現する。シカゴやトロント経由のケベックがどんなにか不憫な状況に置かれてきたことか想像して余りある。もうひとつは BREXIT である。英国が大西洋国家を捨てて欧州連合志向だった時代が終ろうしていることである。カナダに背を向けていた英国が再び北米志向になる。皮肉ではあるが、オンタリオ州トロントに向かっていった流れは再びセント・ローレンス河におけるモントリオールの競争優位を高めていくことが見えてくる。オンタリオ湖周辺地帯の自動車産業の衰退、ケベック州に勃興する世界的に注目度を集めるスタートアップなどのハイテク情報産業群の勢い、さらに CETA (カナダ・EU 経済連携協定) 発足による東部カナダへのかなりポジティブな影響、ブリティッシュ・コロンビア州バンクーバーの経済的躓き、こんなことを考えていくと新たな展望が予想されてくるのである。そして学問的に言わしていただくなら新たな地理経済学の信

憑性をここに感得することができるのである。

### 都市の位相

約 20 年もパリとリヨンで暮らしているとカナダの地政学的な都市経済圏の関係がどうも EU に相似しているのではないかと思うことが最近ある。オンタリオ州はいわばドイツでケベック州はフランス、ブラッセルはオタワではないかという都市の位相である。経済的優越によって居丈高に見えるオンタリオ州、劣位と屈辱のケベック州、そこを仲裁する連邦行政の中心オタワ。いくらドイツが優位であってもフランスの政治的外交的文化的実力にはかなわない。同じように現実のカナダの政治勢力地図はいまでもケベック出身の政治家の跳梁が続いている。2018 年 10 月 1 日のケベック州の総選挙が近づいてきた。モントリオールの日刊紙 *Le Devoir* を読んでみると、主要 5 政党間の首班指名をめぐる党内の内紛、政党間の党派的な批判合戦が目立ち本来の政策論争が欠落している印象を拭えないのは



ロベール・ブラッサ首相を官邸に訪ねて

少々残念ではある。

私の青春を大きく影響したあの4年間の駐在したモントリオール。ケベック市長になったジャン・ポール・ラリエ、今のトルドー首相にも似た格好のいい連邦通産大臣にまでなったピエール・プチグル、いつまで経っても世界のフランス語圏の知的なリーダーシップを担っているジャン・ルイ・ロワ、ケベックの近代的な政治家を代表していたダニエル・ジョンソン。いち早くジェンダーの問題意識に目覚めたケベックはパリよりも先行していた。多くの女性たちに啓発された。ラジオ・カナダの作家ルイズ・ボンバルディエ、連邦カナダ・モントリオール局長マノン・ヴェナ、ケベック経団連ルイズ・フェクト、ケベック副市長モニック・ジョラン、日本にはまだなかった解放されて澁刺とした彼女たちは眩いばかりであった。彼らは永久の友人として今でも頭のなかに焼き付いて離れない。そんな具合でロベール・ブラッサ首相を私がその官邸に訪ねることになったこともある。日本はあの時の世界NO.1の国から成熟期に。ケベックは憂愁のときを過ごした後、今、もうひとつの社会に向かって今度は成熟のときを迎えたが。

(パンテオン・ソルボンヌ後期博士課程)

\*\*\*\*\*



●編集後記●

瀬藤会員のご寄稿にもあるように、この6月にエアカナダの東京・モントリオール便が就航します。トロントのピアソン国際空港の大混雑もあり、大西洋カナダやアメリカ大西洋岸の諸都市からの乗り継ぎ需要も見込まれるようですが、日本・ケベック交流や日本人の観光行動にどのようなインパクトをもたらすでしょうか。成田空港とトルドー国際空港のフライト情報に、それぞれモントリオールや Tokyo という文字がみられるのももうすぐです。

また、6月にはシャルルヴォワ地方で主要国首脳会議(サミット)が開催されます。シャルルヴォワ地方は、ケベック市から自動車でセントローレンス川北岸を北東へ向かい、2時間弱で到達する風光明媚な地域です。美食でも知られ、首脳たちの晩餐会のメニューが気になります。(T)

日本ケベック学会 (2018年4月現在)

●主要役員

- 立花英裕 (会長)
- 伊達聖伸 (副会長)
- 丹羽 卓 (副会長)
- 矢頭典枝 (副会長)
- 小倉和子 (顧問)

●広報委員

- 大石太郎
- 丹羽 卓
- 片山幹生
- 杉原賢彦
- S・コルベイユ
- 小松祐子

\*\*\*\*\*

AJEQ ニュースレター

年3回発行

発行人：立花英裕 編集人：大石太郎